

## 天理スポーツ シンポジウム⑦

今回は指導者の立場から話された、橋本和典氏の講演である。

## 橋本和典氏の講演

指導者の立場からということで、日頃から感じていること、また、今までの経験等についてお話したいと思います。

現在は、日本身体障害者アーチェリー連盟で強化を担当しています。他には、指導員の全国的な組織として、障害者スポーツ指導者協議会というものが日本障害者スポーツ協会の組織の中にありますが、その中で、障害者スポーツ指導員の養成というものもやっています。



私自身に置き換えて振り返ってみますと、私はこの天理大学体育学部を卒業させていただいて、すぐにこの道に入りました。ただ、その入った動機というのがはなはだ不純なものでした。それは、たまたま4回生の時に、ほぼ決まっていた大学の方から、年末に学生数が減っているので教員を増

やす訳にはいかないから、あの話はなかったことにしてくれといきなり言い渡されたのです。危うく就職浪人になるところでした。今は田原本町にありますリハビリテーションセンターのほうに自立更生センターが移っていますが、当時、明日香村に身体障害者更生指導所という訓練施設があり、そちらのほうから、体育の指導員ということで募集があったのです。渡りに船ということで、大学に行って体育をするのも、またそういう訓練施設で体育をするのも、あまり変わらないだろうと、本当に軽い気持ちでこの道に進みました。しかし、ふたをあけてみますと、そこはいわゆる入所施設で、障害を持った方が訓練をする施設でした。障害の程度、種類もまちまちで具体的な例を挙げますと、脳血管障害などで半身麻痺になった人、脊髄損傷、両下肢麻痺、脳性麻痺で四肢麻痺の人、あるいは切断の人、そういう人が30人ぐらいおられたのです。その方たちを対象にスポーツ訓練をするのです。当時の施設長は「これからのリハビリテーションは、個々の機能回復も大切であるが、いわゆる、スポーツを通してトータルで行動力を高めていくということが非常に大切である。」と言うのです。このようなことで、スポーツ訓練を担当せよと言われたのでした。

大学出たてですから、はりきって色々なことをしようと思っただけですが、当時、体育学部にはリハビリテーションに関するような講座はひとつもありませんでした。だからまるっきり手探り状態でした。まず、自分の頭の中にあったのは、教職を目指して教職課程もとっていたのですが、現実には障害のある人たちが対象である。それと、後ほど考え方を訂正することになるのですが、障害があるから普通のことはできないだろう、だから何か特別なものを考えなければ、彼らの要求に応えられないだろう、というようなことで試行錯誤を繰り返しました。

障害の程度が軽い人に合わせたら重度の人はできない、重度の人に合わせると、軽度の人じゃ今度は面白くないと遊んでしまう、そういうのが2〜3ヵ月続きました。ある日、プツンと切れまして、「もう、何が何でもソフトボールをやる！」と、全員グラウンドに集めて、やりかけたら、色々なことが出てきたのです。例えば、

「そんなもん空中を飛んで来るボールがある。打たれへん。」

「そしたら転がそうか。」

これで出来るかと思うと、まだいるのですね。

「動いているボールは打たれへん。」

「そしたらホームベースにボール置こうか。」

もう大丈夫かと思ったらまだ出てくるのですね。

「ソフトボールが小さいから当たりにくい。何とかしてくれ。」

結局、サッカーボールを使うことになりました。そういうふうに、用具を変えていったのです。

それから、今度は走る方。例えば、手首を切断した人。バットを思いっきり振ることは出来ませんが、足はどうもないので、ちょこんとバントをしてビュッと一塁へ走っていくのです。たいていセーフ。脳性麻痺、四肢麻痺の人。バットは振り回せて、ある程度ボールは飛ぶのです。ところが、打ったことによって自分の立位バランスを崩して必ず倒れるのです。起き上がった頃には当然、ボールは一塁ベースにいついていて、いつもアウトです。だから「こんな面白くない。あの人、いつもバントしてセーフ。僕いつもおもいっきり打ってアウト。何とかしてくれ。」

通常、ホームベースがあって、一塁、二塁、三塁があります。そこで、訓練生の皆さんで考えて「おい、考えてみたら、一塁ベースを何も一つだけとこだわらなくてもいいよな、増やそう。」それで歩行能力に応じてホームと一塁の間にベースを3つ増やしました。どのベースを選択するかは、訓練生がお互いに、「おまえ、1番速いやつ。おまえは2番目。あなたは3番目。」先生、一番近いベースはどこに置くの?」さきほど言いました、バットを振ったら必ずこける人。これを、無条件にセーフにすると、やっぱり具合が悪いです。それで本人に言ったのは「こけるのは仕方が無い。せめてこける方向をなんとかコントロールしてよ。」一塁方向にこけて、手を伸ばせば届くところにベースを置きました。そうしたら、何本かに1本セーフになりました。だいたい、2〜3回に1回ぐらいでしょうか。うまい具合にこけてセーフになっていた。そして他のベース間にも中間ベースを置きました。セーフになった人は打席から中間ベースに歩いていける。これでランナーの条件はクリアできてきました。

さらに、「先生、バントしてセーフになるのは、あれ何とかしようよ。あれ、何とかアウトにする方法を考えようよ。」というようなことがやっぱり出てきて、「そうしたら、最低限、ボールが止まったらアウト。だから、手首の切断した人も、何とかラインを越えるよう、バットをもう少し強く振る工夫をしようよ。」というような制限を決めました。これで、打つ、走るをクリアしました。今度は投げの方です。(つづく)